

〈論文〉

サセックスにおける閉鎖型村落と開放型村落の構造

—農村工業の展開と非国教主義の伝統—

須 永 隆

The Structure of 'Closed' and 'Open' Villages in Sussex: The Development of Rural Industries and Nonconformist Tradition

Takashi Sunaga

Abstract

It has been often proposed that there were close relations between the development of rural industries such as textile manufacturing or iron production and that of religious nonconformism in English economic history. Recent studies have shown that two contrasting agricultural regions existed in English rural countries, developing their own cultures linked to the different social structures. In the eighteenth and nineteenth centuries, most villages in arable farming regions developed into 'closed villages' in which a resident landlord owned more than half the acreage of the township, taking strong control of his tenants in collaboration with parsons of the English Church. On the other hand, most villages in wood-pasture regions became 'open villages' in which there were many small peasants (freeholders) in sympathy with nonconformist Christianity. As for Sussex the South Downs, the Coastal Plain and the Scarpfoot Bench of the south side were arable regions with closed villages dominant, whereas most open villages existed and small peasants worked with some rural industries in Wealden regions of the north side. This paper aims to analyze the contrasting villages of Sussex based on their religious geography and sociology.

1. はじめに

イングランド史において農村工業（とくに毛織物工業や製鉄業）の展開と非信従主義・非国教主義（nonconformism）——ロラーズ（Lollards）、ピューリタン、ディセンターズ（dissenters）——の伝統とは密接な関係があるといわれてきた¹⁾。イングランド各州に関する諸論文を読むと、ほぼ例外なくこの関係が扱われているし、工業史の側からも、あるいは宗教史の側からも、その相互連関を示す事例が多く扱われている²⁾。わが国でとりわけ深く掘り下げられてきたマック

ス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』においても、禁欲的プロテスタンティズムの共鳴盤の中心が農村工業地帯にあることを示している。16・17世紀のイングランド史で「世論の強力な反独占の立場が、国王との政治上の権力闘争の他に、ピューリタニズムの倫理的動機と大金融勢力に対する市民的な中・小資本主義の経済的利害」の結合からなるとヴェーバーが主張したとき³⁾、そのピューリタニズムは王政復古(1660年)以降における非国教主義の伝統の起点となるものであったし、また「市民的な中・小資本主義の経済的利害」は近年ではアンダーダウン等の17世紀研究者により、毛織物工業地帯の *middling sort of people* として検出された人びとのそれを指していることがわかる⁴⁾。アンダーダウンが強調する、市民戦争時の党派構成における地域性とその上で展開する伝統主義対近代主義とでもいうべき対照的な文化、その対立は、いくぶん図式的で単純との批判が出るにしても⁵⁾、歴史過程の中軸を理解する上で深い洞察を示している。形成された「対照的なコミュニティ」(*contrasting communities*)⁶⁾はそれぞれに原理を異にし、異なる世界を出現させる。平場穀作地帯 (*arable farming regions, fielden districts*) と森林牧畜地帯 (*wood-pasture regions, forest-pasture regions*)⁷⁾はそれぞれ異なる社会を作る。

その際に、宗教的要因が異なる文化形成の核となっており、やがてイングランド教会のヘゲモニーで動くチャーチ (*the Church*) 型の世界と、イングランド教会のヘゲモニーに食い込む形で非国教主義が存在するチャペル (*the Chapel*) 型の世界とが出現し、両者が長い伝統を形成する⁸⁾。ある歴史家はこの二つの世界を閉鎖型村落 (*closed villages*) と開放型村落 (*open villages*) の対照として展開している⁹⁾。近年イングランドにおいては宗教地理学 (*religious geography*) の手法がコンピュータの力を借りて急速に発展しており、統計処理を含めて緻密な論稿が現れている¹⁰⁾。

わが国の研究史をふり返ると、ジョーン・サースク (*J. Thirsk*)、アラン・エヴェリット (*A. Everitt*) の成果を早い段階から取り入れケントやレスターについて本格的な論文を書いたのは、中村勝已慶應義塾大学名誉教授である¹¹⁾。ケントの研究において王政復古後の非国教徒の社会的存在を貴重な調査史料である *G. L. Turner, The Original Records of Early Nonconformity under Persecution and Indulgence*, 3 vols, London, 1911 を利用し解明している。同様にレスターの研究においては、ターナーの史料にホスキンス (*W. G. Hoskins*)、エヴェリット、サースク、ニコルス (*J. Nichols*) 等の地方史研究を重ね合わせて非国教徒の社会的存在を検討し、彼らが村落共同体規制の弱体ないし解体した地域に多く居住し、皮革工業・織物業・衣料工業・食品加工業等の職業で生計を立てていたことを解明する。現在イングランド地方史研究は地帯別による分析が中心であり、中村教授の先見性は高く評価されるべきだろう。

また、工業化の起源を中世の定住形態にまで遡り、ウッドランド (=森林地帯) とりわけ *royal forest* の重要性を指摘し、「従来の伝統的な歴史学の成果の他に、考古学、地名学、古生物学、歴史地理学、宗教発展についての研究、そしてこれ等相互の積極的な交流と協力を目ざしている『景観史学』」¹²⁾の成果を前向きに吸収すべきことを促してきたのは、篠塚信義東北大学名誉教授である。イングランド地方史研究は現在、広い意味で「景観史学」が基礎となっており、篠塚教授の貴重な

指摘を噛みしめる必要がある。

本稿は、かつて筆者が論じたこともあるサセックスについて再度取り上げ、農村工業と非国教主義との相互連関を論じることを目的とする¹³⁾。

2. サセックスの地帯構造

戦前から戦後にかけての経済地理学 (economic geography) の発達により、中世以来のサセックスが二つの対照的な地域、すなわち南部を中心とするチョーク・カントリー (the Chalk) と北部を中心とするウィールド地帯 (the Weald) からなることはよく知られてきた¹⁴⁾。

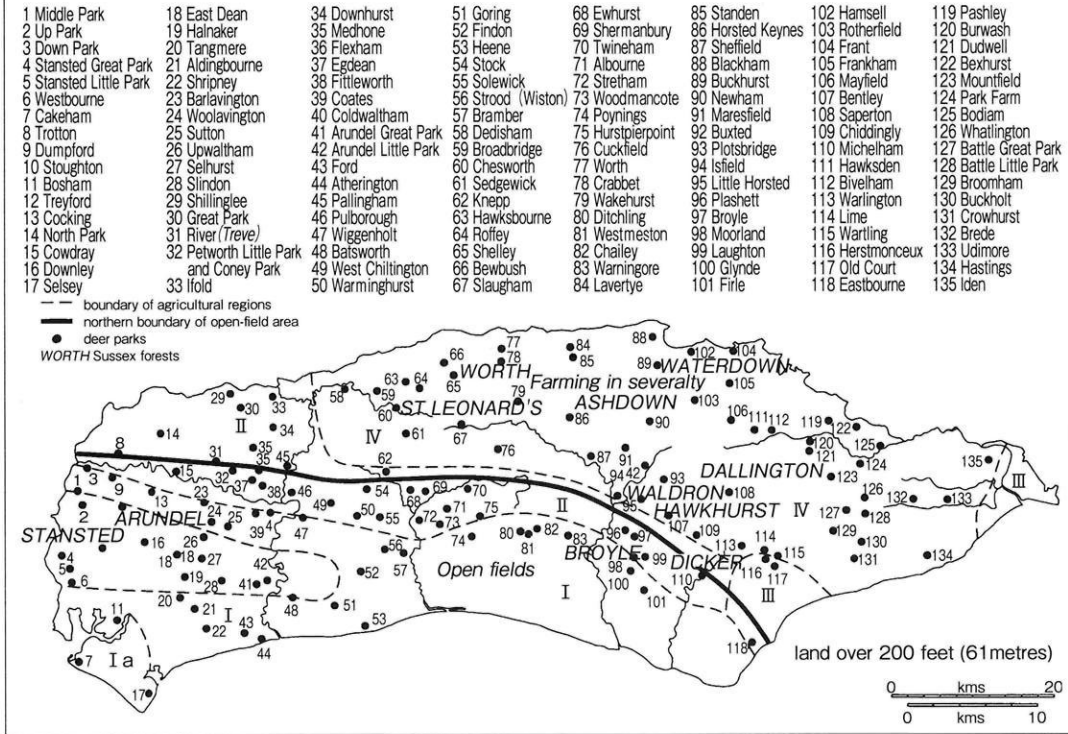
前者のチョーク・カントリーはダウンランドとも呼ばれ、基本的には地味の肥えた平場地帯である。サセックスの場合、the South Downs、the Coastal Plain、the Scarpfoot Bench がそこに該当する地域であり、中世期に集中した植民がおこなわれ、比較的小さなマナ (荘園) 単位・教区単位からなっており、しばしば両者の境界線は重なっていた。資源面では、燃料で使用する森林がほとんどなく、建築資材もウィールド地帯から購入していた。農業形態からみると、17世紀初頭においても、マナにおける領主直営地 (demesne) が存在しており、それを一括貸出ししていることも多々あった。農民の保有形態としては慣習土地保有農が支配的で、自由土地保有農が僅少であった。土地利用は穀作と牧羊を中心になされていたが¹⁵⁾、家内工業を営む職人はほとんど存在しなかった¹⁶⁾。

図1はマーク・ガーディナー (Mark Gardiner) (Queen's University of Belfast) により作成された地図である。図中のⅠ～Ⅳは地味の度合いを示しており、Ⅰはサセックスで最も地味の豊かな地域で小麦・大麦が栽培される。だが、一様にそうではなく、西部のⅠaは地味が悪く飼料用のオート麦がつくられる。Ⅱは、中程度の地味の肥沃さを示している。ここでのマナは小麦・オート麦を栽培し同時に牧羊・牧畜をおこなう。Ⅲは湿地帯で牧羊とオート麦の栽培をする(Ⅳについては後述)。

ここで記憶すべきなのは、中心の太線であり、これが開放耕地帯 (open-field area) の北限を示していることである。開放耕地制度の研究で有名なグレイ (H. L. Gray) は巻末の付録で各州の耕地制度を列挙しており、サセックスについては Amberley (二圃制)、Broadwater (二圃制)、Alciston (三圃制)、Angmering (三圃制)、Atherington (または Aldington) (三圃制)、Eartham (三圃制)、Nutbourne (三圃制)、Ovingdean (三圃制)、Prinsted (三圃制)、Worthing (三圃制)、Heighton (三圃制)、Rackham (三圃制) の各村落 (townships) が挙げられているが¹⁷⁾、こうした諸村落は図1の太線内 (Ⅰ) に位置している。

ここから分かるように、サセックスの穀作地帯と開放耕地帯がちょうど重なっているのである。またペルハム (R. A. Pelham) がサセックスにおける牧羊の分布 (1341年) を整理しているが、牧羊地帯は South Downs と呼ばれるⅠの部分に集中しており、それも東部にいくにつれ飼育頭数が

図1 14世紀中ごろの土地利用



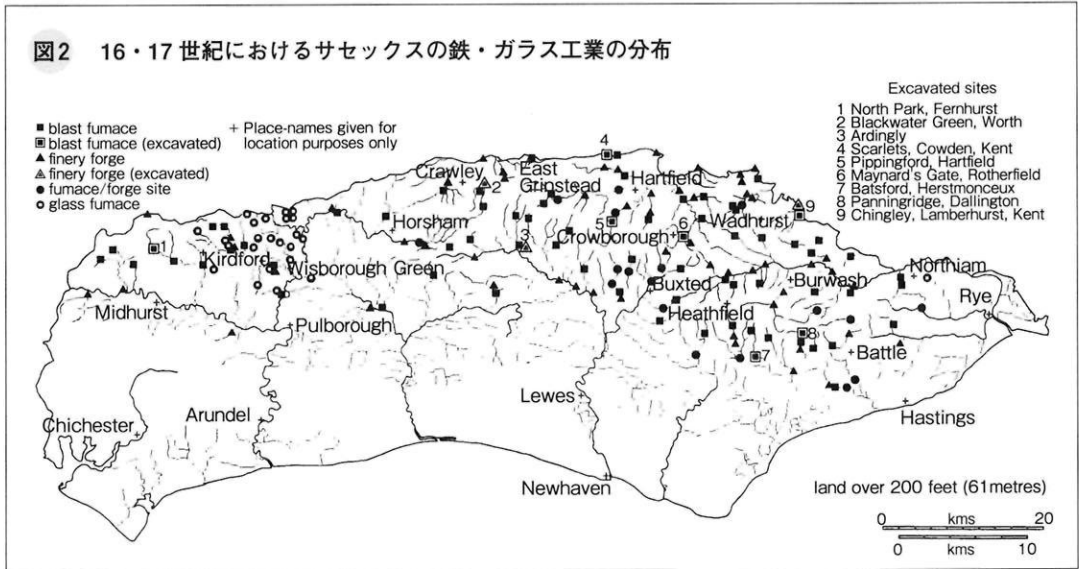
[出所] Kim Leslie and Brian Short (eds.), *An Historical Atlas of Sussex*, Phillimore, 1999, p. 39.

増えている。また西南部のチチェスタ Chichester 周辺の地味の肥えた地域にも牧羊は集中している。「疑いもなく、開放土地制度の刈り株 (stubble) と休閑地 (fallow) がこうした羊の群れを養うのに大切な役割を演じた」のである¹⁸⁾。

これに対して、こうしたダウンランドと対照的なのが、サセックスの北側に展開するウィールド地帯である。一部を除き、図1のIVがそこに該当し、サセックス内で一番地味の良くない場所であり、オート麦の他にライ麦が栽培されていた。限定的だが豆 (legumes) も栽培されている。牧羊は僅少で、飼育されていたのは牛が中心であった¹⁹⁾。ウィールド地帯には High Weald と Low Weald があるが、共に土壌は砂土や粘土質であり、また草地に覆われ湿気も多いため穀作には向かなかったのである。土地保有形態はダウンランドとは対照的で、100 エーカーにも満たない小土地保有農が中心となっており、それも慣習土地保有農 (copyholders) よりは自由土地保有農 (freeholders) が支配的であった。一方で当地帯は農村工業の叢生地であることに注意すべきである²⁰⁾。耕作地がしばしば存在しておらず、牧畜などをおこないながらかつ農民は農業の他に工業に従事していた²¹⁾。

図2は、産業考古学を専門とするデイヴィッド・クロスリー (David Crossley)²²⁾ (University of Sheffield) が整理したサセックスにおける製鉄業・ガラス工業の分布図である。この図から明瞭に

図2 16・17世紀におけるサセックスの鉄・ガラス工業の分布



【出所】 Kim Leslie and Brian Short (eds.), *An Historical Atlas of Sussex*, Phillimore, 1999, p. 63.

読み取れるように、製鉄業・ガラス工業の分布には高度の地域性があり、ガラス溶鉱炉（glass furnace）はLow Weald（西ウィールド）に、鉄溶鉱炉（blast furnace）・鍛冶場（finery forge）はHigh Weald（中央・東部ウィールド）に集中しており²³⁾、ダウンランドには皆無といってもよい。こうした工業でまず必要とされるのは、燃料であり、石炭が利用される以前においては雑木林（cop-pices）が使用されていた。明らかに燃料用の森林の存在が両工業にとり本質的であったことは理解できるが、その急速な発展は、16世紀中頃のフランス人移民の流入²⁴⁾をきっかけとし、周辺地域の人口増加とロンドンの商業的成長に並行することに注目すべきである。

この製鉄業の広がりには、ケント、サリーを含めたウィールド全体でみる必要があるが、1496年に国王の命により鉄溶鉱炉が最初に導入されたのが、サセックスのNewbridge（西ウィールド）であり、これはスコットランドとの戦争の武器調達のためのものだった。また1542年サセックス東南部に1基、Ashdown Forest周辺にもう1基が導入され、その後ウィールド各地に鉄溶鉱炉が設置されるようになり、1540年代に生産能力が急成長している²⁵⁾。

製鉄業の担い手については、W. Llewellynが*Archaeologia Cambrensis*, 1863の中で「サセックス州においてはもっとも著名な土地貴族の何人かが繁栄するiron-mastersとなった。多くの人びとはヨーマンや製造業者（manufactures）の出身だが、鉄の生産・製造から生じる利益を通じて、豊かな土地所有者階級になったのである」と記している²⁶⁾。また製鉄を通じて製造される中心的商品には大砲（cannon、ordnance）があった²⁷⁾。サセックスの製鉄業は18世紀に入り衰退していくが、17世紀の段階ですでに縮小を経験しつつある。議会へのとある請願書を見ると、1653年にサセックスに27基の溶鉱炉があったが1664年には11基に、また1653年に42件の鍛冶場があったが1667年には18件となったとあり、閉鎖されたそうした溶鉱炉や鍛冶場の証拠を根拠とすると、サセッ

クスの製鉄業全体で17世紀後半には衰退傾向の存したことが考えられる²⁸⁾。

また西部のウィールドに集中するガラス溶鉱炉の活動については1550年代に活性化し、製造地としてKirdford、Hambleton、Chiddingfold、Wisborough、Green、Lurgashall、Alford、Ewhurst、Billingshurstがあった²⁹⁾。代表的なガラス製造業者にはSehurterre、Peyteowe、Strudwick、Moseなどの各家があったが、彼らは元々自由土地保有農（ヨーマン）であり、やがて富を集積してジェントリー（地主）になっている。

こうしたウィールド地帯における多くの職人は小土地保有農（small holders）でもあり、家畜（牛・羊・豚・家禽）を飼育しながら農作物の栽培もしていた。熟練労働者として存在する場合もあるが、その多くは季節労働者・パートタイム労働者であったと考えられる³⁰⁾。

3. 18・19世紀におけるサセックスの産業構造と社会

3.1. サセックスの地帯構造と産業（18・19世紀）

まず議論を進めるにあたり、どの地域でもそうであるように地帯構造というものは自然環境に支配されており、中世以来長期にわたりそれほど大きな変化はみられないことを前提しておくべきである。

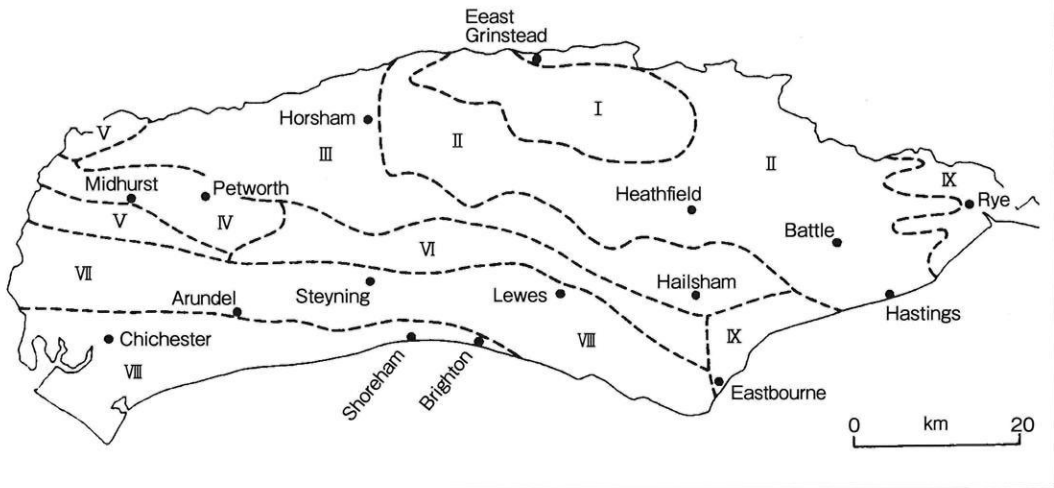
1750年頃におけるイングランド経済はまだ地域経済の寄せ集めにすぎず、ブライアン・ショート（Brian Short）は、図3のようにサセックスの地帯構造と農業を9地区にわけて整理している³¹⁾。IはLowland HeathでここにはSt Leonard's Forest、Worth and Tilgate Forests、Ashdown Forestなどの森林があった。当地の農民は共同放牧とウサギ（coney）の繁殖をしていた。IIはサセックスの北側の大部分を占めるHigh Wealdで森林・牧畜地帯である。農業活動では牧畜（牛の肥育）が主流で、1840年代においても土地の25%以上は牧草地（grassland, meadow）として利用されていた。東部においてはホップ（hop）や果物が栽培されていた。非農業的職業も重要でtimber workers、wood craftsmen、bark strippers、leather workers、charcoal burners、gunpowder manufacturesなど何らかの点で木材を使用する職種が多く存在した。

IIIはLow Wealdで森林牧畜地帯である。主として牛の肥育と酪農（dairying）がおこなわれている。IVはサセックス北西部に位置していて、牧羊・穀作地帯であり、牛の肥育と酪農がおこなわれ果樹園もある。またVには共同放牧地（common grazings）があり、ウサギの繁殖がなされている。VIはウィールドのすぐ南に位置し、穀作・牧畜の混合形態、VIIはSouth Downsで、農民は牧羊・穀作に従事しサセックスの平場農業の典型地帯である。VIIIはサセックス西南部の沿岸平野部で穀物生産を中心とし、家畜飼育もあり、中心都市はチチェスタ Chichesterである。IXはサセックス南東部に位置する湿地帯で牧草地帯であり、家畜の繁殖・飼育がおこなわれていた。

ところで、18世紀以降、工業発展の観点からすると、サセックスでは諸工業の順調な発展はみられない。これは研究史の上からも確認されていることで、18世紀以降のサセックスの工業化の

図3 サセックスにおける地帯構造別農業分類 (1750年頃)

- I Lowland Heath (common grazings, coney warrens)
- II High Weald Wood/Pasture (mixed farming, cattle fattening, hops and orchards)
- III Low Weald Wood/Pasture (mixed farming, cattle fattening, dairying)
- IV Petworth and West Rother (mixed sheep/grain, dairying, orchards)
- V Greensand Heath (common grazings, coney warrens)
- VI Scarp Foot Zone (mixed arable/livestock)
- VII South Downs (mixed Sheep/grain, sheepwalks)
- VIII Sussex Coastal Plain (grain production, some livestock fattening)
- IX Marshland Open Pasture (livestock breeding/fattening, wool production)

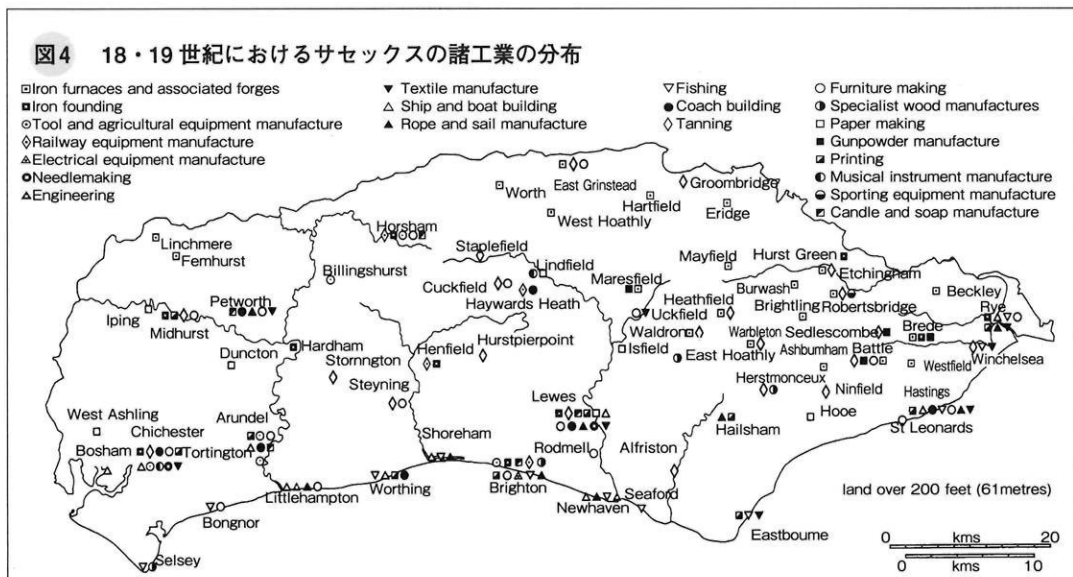


[出 所] Brian M.Short, The Changing Rural Society and Economy of Sussex 1750-1945 [in The Geography Editorial Committee (ed.), *Sussex: Environment, Landscape and Society*, Alan Sutton, 1983], p. 149.

特徴は、農村工業の発展を通じて産業革命に向かうというよりは、反対に農村工業が十分に展開しないで「脱工業化」(de-industrialisation)の方向に向かうことであった³²⁾。ただし、図4で示されるように、農村工業が消滅してしまうのではなく、ランカシャーやヨークシャーなど北部のように工場制機械工業を広範に経験することなく、工業活動が散在的に農村工業のまま継続することでもあった。

この図4は産業考古学者ブライアン・オーステン (Brian Austen) により作成された18・19世紀における産業立地の地図である。イングランド北部の産業革命により経済の旗手となるのは綿工業と製鉄業であるが、サセックスの繊維産業については、東部沿岸地域のRye、Winchelsea、Hastings、Eastbourne、すこし内陸に入ってUckfield、Lewes、さらに西部のPetworth、Chichesterで孤立した形でウール、綿布、リネン、絹、粗麻布 (sacking) が製造される程度だった。

一方、製鉄業は繊維工業と比べると長期にわたり存続したが、1700年時点でサセックスの鉄は、スウェーデンからの輸入品との価格競争力の点で負けてしまい、徐々に衰退していく。鉄溶鉱炉 (iron furnaces) や鉄 casting (iron founding) の分布をみると、鉄溶鉱炉は、Beckley、Brede、West-



[出所] Kim Leslie and Brian Short (eds.), *An Historical Atlas of Sussex*, Phillimore, 1999, p. 105.

field、Battle、Etchingham、Robertsbridge、Ashbumham、Burwash、Brigting、Warbleton、Eridge、Mayfield、Heathfield、Waldron、Hartfield、Maresfield、East Grinstead、West Hoathly、Worthといった北東部ウィールドと、Linchmere、Fernhurstといった北西部ウィールドに点在している。また鉄鑄造についてはRye、Brede、Hurst Green、Lewes、Brighton、Hensfield、Horsham、Hardham、Midhurst、Chichesterでおこなわれており、特定地域への集中はみられない。

停滞するサセックスの製鉄業を7年戦争（1756～63年）まで支えたのは大砲製造だったといわれているが、1717年ウィールドで稼動していた溶鉱炉は13基であったのに対し、70年後には3基と減少し、1813年にAshbumhamにある最後の溶鉱炉が閉鎖した³³⁾。東部ウィールドで長く存続したのは製鉄業であったが、18世紀後半、産業革命の到来を告げるように製鉄業の中心はウィールド地帯からウェールズ、ミドランズ、スコットランドへと移っていく。アーサー・ヤングをして19世紀初頭ウィールド製鉄業の衰退を嘆かせ、19世紀中葉には当地の製鉄業は完全に過去のものとなる³⁴⁾。

3.2. 対照的な世界の形成と確立

18世紀末のダウンランドは、中心となる村の周辺に広大な牧羊場（sheepwalks）と共同地（common fields）が展開する世界であり³⁵⁾、これに対してウィールド地帯は、小さな畑地が散在し、かつてのヒースの荒野や森林、孤立した農場が複雑に入り組む世界であった。

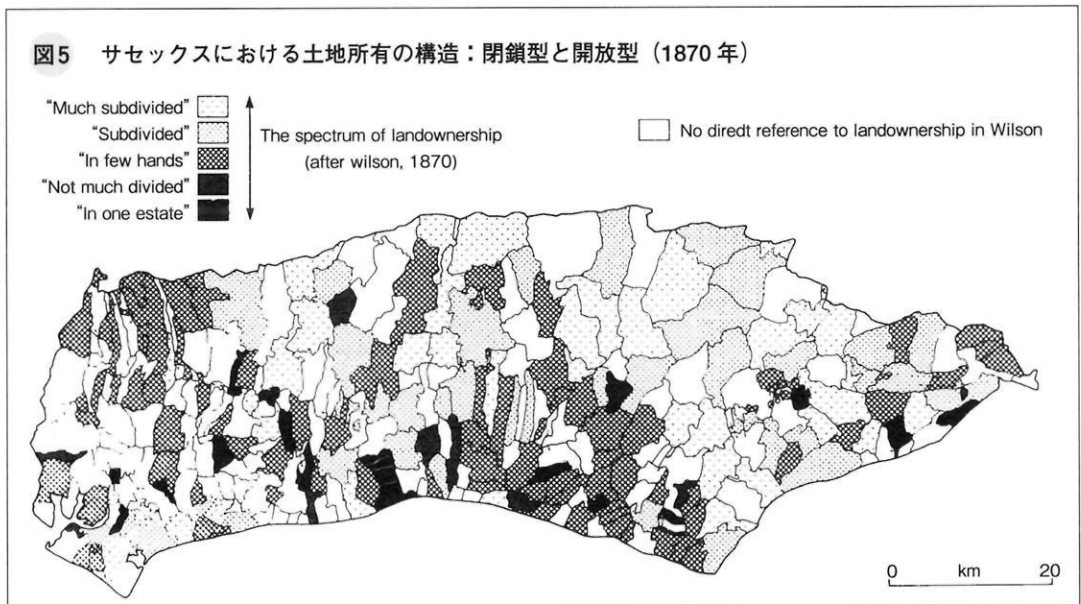
18世紀末になると両地帯の根本的な差異は誰の目にも明らかであり、サセックスにおいても閉鎖型村落と開放型村落の対照として意識されるようになる³⁶⁾。図5はJ. M. Wilson, *The Imperial Gaz-*

etteer of England and Wales, 6 vol., A Fullarton and Co., Edinburgh, Glasgow, London, Dublin and New York, c. 1870-2 を利用して³⁷⁾、ブライアン・ショートが整理したものである。

ところでこの「閉鎖型村落」と「開放型村落」という用語は後代の発明ではなく、同時代人が広くイングランド全体で使用した言葉である。同時代の救貧法関連の著者はあたかも両村落に明確な区別があるかのように論じている³⁸⁾。

たとえば同時代の農業思想家・農業政策論者として著名なジェームズ・ケアド (James Caird) は、1852 年の著作において、救貧税との関連で、「閉鎖型教区 (the close parishes) ——ここでは、すべての所有地 (property) が一人または二人の領主 (landlords) の手中にあり、追加的な小屋 (cottages) 建築の許可がおりておらず……」と記しており³⁹⁾、ウィルトシャーを扱う箇所で「肥沃な谷と豊かな牧草地 (pastures) を有する州の北西部は、Salisbury Plain を通り南の境界線から Devizes 付近まで伸び州南東の大部分を占める chalk downs とはまったく対照的である」とし、後者においては「現行の定住法 (law of settlement) により擁護され、そうした外部からの失業労働者流入の恐れがあるので、大土地所有者 (large proprietors) は自らの土地 (estates) に小屋を建てさせないようにしている。そのために負担は、人口が追いやられる開放教区 (open parishes) に負わされる」と書いている⁴⁰⁾。こうした用語こそ使われないが、ハンプシャーにおいても、二つの地域 (two districts) という形で wood-pasture と chalk-arable-lands の対照が記されている⁴¹⁾。

さらにリンカンシャーでは「ある場所では、人びとは、一人または二人の土地所有者の支配にある閉鎖型教区から吐き出されて来て、高い家賃を小屋に払っており、限られた小屋を獲得するため



[出所] Brian M. Short, *The Changing Rural Society and Economy of Sussex 1750-1945* [in *The Geography Editorial Committee* (ed.), *Sussex: Environment, Landscape and Society*, Alan Sutton, 1983], p. 155.

に互いに競争せざるをえない。当然に投機家は人びとの必要を利用し、宿泊施設を確保しようと開放型教区におもむく。人びとはかくして仕事場から非常に遠いところに住まざるをえなくなり、仕事場にいくのに6・7マイル驢馬の背に乗ることが普通となっている」とある⁴²⁾。また「労働者に関する、もう一つの悪の閉鎖型・開放型教区システム (the system of “close” and “open” parishes)」とあり、「このシステムにより大土地所有者は、労働者が働く教区から彼らを追い払い、土地が分割し、貧困に対処する組合 (combination) のない、遠い村落に向かわせることになる」とあるが⁴³⁾、前者が閉鎖型村落、後者が開放型村落であることは容易に想像がつく。当時救貧税の負担を巡り、制度上の矛盾として両者の教区が扱われていることに注意したい。

さて図5は、対象となる土地に対する所有者数を基準として5段階で分類されている。ブライアン・ショートの分析によると、ウィルソン (J. M. Wilson) は300教区 (parishes) の内、「一人の所有者」(in one estate) —54件、「ほとんど分割されてない」(not much divided) —31件、「数人の手に」(in few hands) —109件、「分割された」(subdivided) —64件、「ほとんど分割された」(much subdivided) —42件としており、このうち閉鎖型村落に該当するのは「一人の所有者」から「数人の手に」までで、件数では194件、また開放型村落に該当するのは「分割された」、「ほとんど分割された」で合計106件である⁴⁴⁾。

この図からわかるように、ウィールド地帯と非ウィールド地帯とは対照的な特徴を示しており、明らかに開放型村落はウィールド地帯 (北側) に、閉鎖型村落は非ウィールド地帯 (南側) すなわち Scarpfoot, Downs, Coastal Plain に多く存在している。閉鎖型村落が一番典型的に現れる場所は南部沿岸 (Coastal Fringe) 地域である。たとえば西部サセックスにおいては、1837年時点においてリッチモンド公爵 (the Duke of Richmond) が Goodwood Park の土地 17,000 エーカー以上を所有しており、そこから約 20,000 ポンドの地代収入を得ていた。Arundel 付近においてはノフォーク公爵 (the Duke of Norfolk) が 19,000 エーカー (1837年) を所有していた⁴⁵⁾。その他に、1873年の時点で Petworth の Lord Leonfield (12,210 エーカー所有)、Stanmer の Earl of Chichester (6,558 エーカー所有)、Eridge の Earl of Abergavenny (6,208 エーカー所有)、Wiston の Revd. J. Goring (5,713 エーカー所有)、Midhurst の Earl of Egmont (5,665 エーカー所有)、West Fittleham の Viscount Gage (5,551 エーカー所有) などの大土地所有者がいた。

これに対してウィールド地帯における小土地保有農中心の場所は、Boad Oak, Pumnets Town, Cade Street, Three Cups, Cross-in-Hand, Burwash Common, Woods Corner, Maynards Green などが典型であるが、そこは Forest Ridges にあり、サセックス中央のハイ・ウィールドに位置していた⁴⁶⁾。ウィールド地帯にも、Fletching の Ashburnhams や Lord Sheffield, Buckhurst の Sackvilles などの大土地所有者がいたが、それらはむしろ例外であった⁴⁷⁾。

また、作成目的が異なるので直接的ではないけれども、こうした村落形態の存在を間接的に裏づける証拠のひとつとして以下のような史料もある。すなわち 1850 年に救貧行政に関する「報告書」が作成されているが、この中の Report by Capt. Robinson, R. N., to the Poor Law Board,

on the operation of the Laws of Settlement and Removal of the poor in the Countries of Surrey and Sussex を読むと、他州の場合と同様、放浪者 (vagabonds) とその住居用の小屋 (cottages) 建築をめぐる諸教区の特徴が記されている。貧者 (the poor) を救貧税でどう救済するかという問題は教区の負担に委ねられていたから、普段から教区内で生活する住人は救貧税に過敏に反応し、行政官の報告も自ずと緻密なものとなる。Lewes 南東にあり、サセックス全体からは South Downs に位置する West Firle Union に関する記述では、面積 14,050 エーカー、人口 2,529 人 (1841 年時点)、「小さな農村ユニオン、都市はない、教区は小さく閉鎖的」とあり、労働者の住居 (cottage accommodation) については「不十分。小屋は引き倒され、結果的に大変なすし詰め、衛生状態悪し」とあり、労働条件については「改善している、分配も一般的」とあり、生活保護 (pauperism) は「減少」、放浪者 (vagrancy) は「通常の職業 (profession)」とある⁴⁸⁾。この West Firle には Gage 家という大土地所有者がおり、1873 年時点で領主の Viscout Gage が 5,551 エーカーの土地を所有していた⁴⁹⁾。

これと同様に、サセックス西南部にあり、サセックス全体からは South Downs に位置する West Hampnett Union においては、面積 58,540 エーカー、人口 14,157 人、「農村的、チチェスタの一部を囲む。……教区は小さく、閉鎖的、一部分沿岸」とあり、労働者の住居は「数において不十分。大部分が良くなく、小屋は引き倒され、小屋の所有は大土地所有者から嫌われている」とある。労働条件については「新救貧法導入以前と比べると改善している」とあり、生活保護は「減少……」、放浪者については「救済拒否により低く抑えられている……」とある⁵⁰⁾。ここで紹介した 2 例は閉鎖型教区の場合であり、労働条件が両教区ともに改善とあるのは、労働者の立場から見ると、それを字義通り受け取ることは不可能で、大土地所有者の指令により (不法な) 小屋を強制的に取り壊し、その教区から労働貧民を追い払うことで一般労働者の居住環境を保つという事態を示しているであろう。ただし、教区に責任を持つ領主や教区牧師の立場からすれば、勤勉に働く教区民の救貧税を低く抑えたいと願うのは当然のことであり、1846 年に Berwick Parish (Lewes の東南に位置する小さな閉鎖型教区) の教区牧師 (Rector) であったエドワード・ボーイズ・エルマン (Edward Boys Ellman) は「救貧税 (rates) をできるだけ低く保つことが大切だと考える」理由としては、老後のために小さな小屋や土地を買おうと、貧しい教区民が消費を我慢して貯蓄したカネが、飲酒や浪費の故に救貧税に頼らざるをえない連中を助けるために使われることへの理不尽な思いがあった⁵¹⁾。

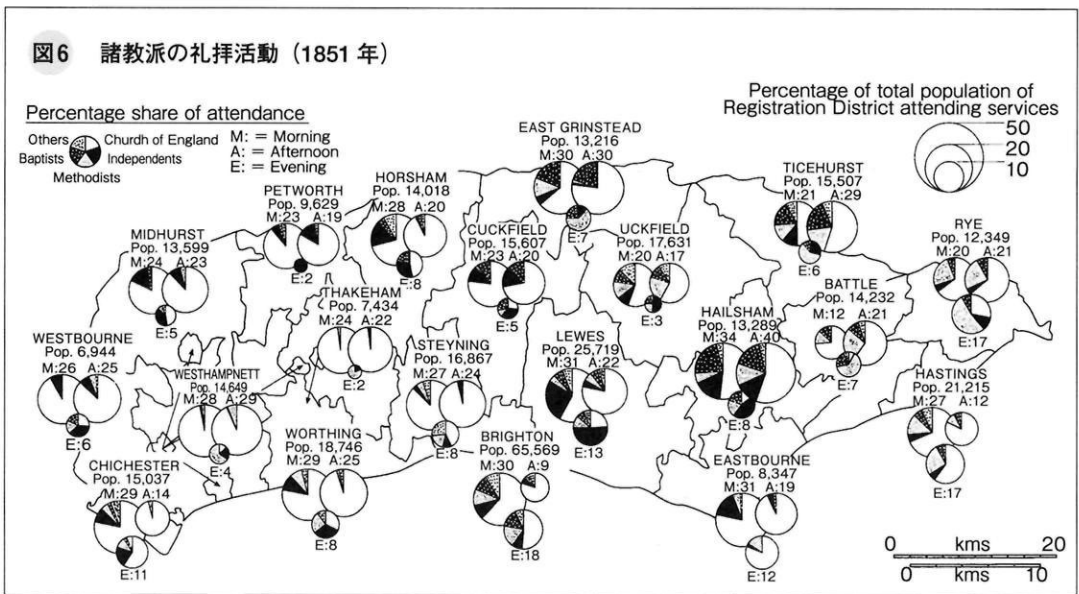
こうして当時においては、もちろん例外もあるが、放浪する労働貧民とその生活保護費 (原資は救貧税) が増大し、その鞆寄せの多くを流動性の高い開放型教区が担い、そのためにそれが救貧行政の面で社会問題化する状況があるのである⁵²⁾。

4. 経済史的に見た非国教徒主義の伝統の形成

図6はメソジズムの研究で著名なジョン・ヴィカーズ (John Vickers) が *Parliamentary Papers 1852: Report on the Census of Religious Worship 1851, ccxxv* を史料として整理したものである⁵³⁾。1851年の宗教センサスについてはサセックスのみならず他の州についても実施されており、ヴィクトリア朝の人びとの礼拝参加の実態を把握するために広く利用されている⁵⁴⁾。

この図では教区 (parishes) をいくつかまとめて、それを登録地区 (Registration District) ごとに括り、そこで集計した数字をグラフ化している。教派としてはイングランド教会 (Church of England)、独立派教会 (Independents)、メソジスト教会 (Methodists)、バプテスト教会 (Baptists)、その他 (Others) となっている。ローマ・カトリック教会はこの「その他」の中に含まれている。宗教社会学的にはイングランド教会の参列者を「国教徒」、そのほかの3教派参列者を「非国教徒」と呼ぶことが慣例である。カトリック教会も非国教徒に含まれるが、ここではさらなる極少数派としてはずしておくことができるだろう。また教会参列者の人数については、1851年3月30日 (日) において、午前礼拝 (Morning)、午後礼拝 (Afternoon)、夕礼拝 (Evening) と3時点を取っている。円の大きさは参列者/人口の割合を示しており、各円の上にある数字はその割合 (パーセント) である。

この円グラフから宗教社会学的あるいは宗教地理学的に如何なることを読み取ることが可能であろうか。まず①どの登録地区においても、イングランド教会に参列する人びとの割合が群を抜くか、



あるいは多数を占めていることを確認することができる。従来わが国の研究では非国教徒に重点が置かれてきたが、他方でイングランド教会への注視が弱かったという事情もあるので、今後の研究方向を示唆する意味でも、参列者数の点でのイングランド教会の優越性は強調しておくべきだろう。全参列者の66.7%がイングランド教会であった⁵⁵⁾。また②教派構成や参列者の割合の点で、登録地区ごとに相当のバラツキのあることがわかる。広く西部と東部を比較すると、西部の方が人口に対する参列者の割合は若干低いけれども、イングランド教会への参列者数自体は東部と比べてずっと多い。サセックス西部（とくに西南部）はイングランド全体からみてもイングランド教会への参列者の多いところとして知られており⁵⁶⁾、Westhampnett District、Thakeham District、Steyning Districtあたりにイングランド教会の中心勢力があると考えられる。反対に、北東部を含む東部においては、イングランド教会の網の目を潜るかのよう、非国教徒の集会が目立っている。とくに顕著なのは、Hailsham District、Lewes District、Ticehurst District、East Grinstead District等であり⁵⁷⁾、西部とは対照的である。

さらにこれに図5の村落構造（土地所有形態）を重ね合わせてみると、③イングランド教会の参列者が多数を占める西部・西南部において所有権は集中気味であり、従って閉鎖型村落が支配的、反対に非国教徒がイングランド教会に食い込み、参列者の多い東部・北東部（ウィールド地帯）において所有権は複数に分散し、開放型村落が支配的であるという、興味深い対照が確認される。これにまた産業構造を重ねてみると、製鉄業は図2で示されたように、北東部のウィールド地帯（森林・牧畜地帯）に展開し、そこに非国教徒の集会が高率の割合で検出される。非国教徒には、周知のように、old dissentとnew dissentがあったが、独立派（会衆派）とバプテテストは前者、メソジストは後者である⁵⁸⁾。そのどちらにおいても、宗教地理学的には同様の特徴があり、デイヴィッド・ヘンプトン（David Hempton）が「メソジズムは家父長的な影響を最も受けにくい地域で最速の収穫を得、それらの地域は自由保有農教区、工業および鉱業村落、市場町、運河港・海港およびその他移住人口の中心地（other centres of migratory populations）を含んでいた」と記す通りである⁵⁹⁾。

宗教地理学を専門とするコールマン（B.I. Coleman）はイングランド教会を軸に教会支配と教区形態との関連を位置づけている。コールマンによれば、19世紀イングランドの農村教区が単一の様相を示すというのは史実に合わず、宗教生活に中心的な役割を演じたイングランド教会が支配的な影響を及ぼすためにはいくつかの条件に依存していた。同様に非国教主義の教会も同じように社会環境から大きな影響を受けていた。

まずは教区運営に関して定住形態（settlement pattern）が大きく影響した。すなわち単一の核村（a single nucleated village）に属する住人が教区教会の近くに居を構え、聖職録保有牧師（incumbent）が容易に監督しやすい場合には、教区としていちばんうまく機能し、イングランド教会に有利に働いた。中世以降に栄えた村落の多数は機能的な教区組織を有し、アングリカンの支配的な慣習に服した。しかし後から人びとが定住した限界地（marginal lands）の場合だと、教区組織がう

まく機能しないことがあった⁶⁰⁾。

ついで土地所有 (landownership) 形態が重要な役割を演じた。土地所有が特定の個人に集中することなく、広く分散した教区の場合には、イングランド教会には有利に働かず、却って非国教徒に有利な土壌を提供した。それが open parishes、freeholders parishes、open villages などと呼ばれる環境である。その反対に貴族や地主が土地に対する単一の所有権を保持する場合、その場所はイングランド教会への宗教上の服従を教区民に促す際の柱となった⁶¹⁾。こうして見てみると、サセックスの場合もコールマンの整理した上記の特徴にはほぼ合致しているといえるだろう。

さらにその教区に居住する住人の職業も特徴的である。一般に農村教区においては「農民」(farmers) との言葉が共通であるが、その内容は一様でない。イングランド教会すなわちアングリカンの支配する世界においては「借地農」(tenant farmers) が領主・地主に依存して生計を立てることになる。このチャーチ型の世界では、職人 (craftsmen)、農業下僕 (farm servants)、若年の独身男性は引き付けられにくい。その反対に、非国教主義が顕著に現れる場所では、半農半工で生計を立てる「小農」(small farmers) や「自由土地保有農」(free holders) が関係している。もちろんサースクも書くように「地主が工業の存在につねに抵抗したというのは真実でない」、しかし「一般的にいうなら諸工業は領主が居住地として選択しない場所で最も繁栄したのであり、そこで一般の人びとは……仕事の機会を自由につかんだ」のである⁶²⁾。

こうして種々の「職人」層——tradesmen、craftsmen、small employers——は非国教主義への強い支えを提供する。多くの商工業者 (tradesmen) や小雇用者 (small employers) は領主・教区牧師の支配力を緩和する平衡錘 (counterweight) として機能する⁶³⁾。興味深いことにウィールド地帯において「自由土地保有農の力を示すしはヨーマンという用語の継続的な使用」であり、1850年代でもこの「ヨーマン」が使われていたのである⁶⁴⁾。

5. 結 語

本稿では数点の地図を利用してサセックスの宗教社会学の基本線を経済史的に整理してみた。これまでの研究史においても、定住パターンがイングランド教会の伝統と非国教主義の教会の台頭・角逐とに大きな影響を及ぼしたといわれており、16・17世紀の間にそれが確立したとされる⁶⁵⁾。閉鎖型村落と開放型村落、チャーチとチャペルの醸し出す地域文化の相違は、差というよりは断絶であり、たとえばジョージ・エリオットの小説『サイラス・マーナー』における主人公 (リンネル職工) の異質文化体験として描かれている。主人公サイラス・マーナーは、とある町からラヴィロウに移り住むが、かれの故郷の町は、本稿の文脈を使えば、開放型村落であり、ランターン・ヤードの集会を維持するそこの宗派 (a religious sect) では貧しい信徒も人の上に立つ機会があり、信仰生活において霊的意義と選びを意識させることができた⁶⁶⁾。しかし、移り住んだラヴィロウは、閉鎖型村落であり、「……新しい時代の声にも消されず、多くの古い昔の面影の残っている村であ

り、「われわれが好んで『楽しい（メリー）イングランド』（Merry England）とよび、宗教的な見地からいえば、じつに望ましい十分の一税を納めている、畑地の多い、みのり豊かな中央平原のうちにあった」のである⁶⁷⁾。また、「地主（squire）のカス」だけが特に尊敬されていて⁶⁸⁾、「産業熱や清教徒運動の思潮からは、まったくかけはなれて」⁶⁹⁾いる世界であった。主人公は、ラヴィロウにおける会話において、「教会（Church）のことはなにも知りません」といい、だが「礼拝堂（Chapel）へはゆきました」というのである⁷⁰⁾。この対照的な世界は、当時においてもしばしば相互に意思疎通が不可能であり、話を聞こうとすると、人びとが「まごついてしまう」のである。じつはこれが、ヴェーバーが「アングリカンとピューリタンをイギリス国民性を構成する相対立する二側面と捉え」（松浦高嶺氏⁷¹⁾、「二つの型のイギリス人気質」として指摘した社会的背景なのである⁷²⁾。この人の気質とその社会的背景の関係はいまイングランド史でも注目されつつある⁷³⁾。

また、研究史の上からは、「領主と教区牧師（parson）が一緒に働いている場合にはどこでも、——他の事柄を一定とすれば——、イングランド教会は強力となった」とか⁷⁴⁾、「アングリカニズムと権力との結合は多くの農業村落や小都市で等しく現れた。そこでは教区司祭（the rector or vicar）が間違いなくその地域のエリートでもあり、また世俗権力の保持者がしばしばアングリカン教区（イングランド教会の教区—引用者）でも顕著な身分を占めていた。極端な場合だと、閉鎖型教区（‘close’ or ‘closed’ parishes）の環境があり、そこでは絶大な権力を有する領主（squire）が自分で選んだ聖職者と手をたずさえて働いていた。その聖職者は家族の一員である場合もあった」⁷⁵⁾とあるが、サセックス西南部における閉鎖型村落でも同様の状況を想定することは可能だろう。靴下編み工業で栄えたノッティンガムやレスターで検証されたことだが、支配力の強い特定領主が特定の工業を禁止するケースも確認されている⁷⁶⁾。

他方で18世紀に開放型村落となる地域は、その村落に領主がいなくてか不在であるとか、あるいはいたとしても領主が寛容で干渉しないとか、などの理由で、領主の支配力が脆弱で、農民の種類の点からは自由土地保有農が多い地域であるといわれてきた⁷⁷⁾。そこは森林・牧畜地帯に位置し、村落形態は散居制（dispersed settlement）が支配的で、市民戦争（Civil War）以前における暴動（riots）のほとんどがそこで生じていた⁷⁸⁾。開放型村落は、領主制やマナ制度の支配が強い閉鎖型村落に、労働力も供給していた。

チャペルという言葉に象徴されるこの開放型村落は、職業生活をおくる個人が、信仰者としての責任でもある自己規律（self-discipline）と木目細かな道徳性を行使する場でもあったし、それが期待されもした⁷⁹⁾。これは宗教社会学的には、イングランドの市民的自治意識や市民的關係を問う場合の核の部分形成することになる⁸⁰⁾。

こうして非国教徒の宗教社会学を構築する場合、全体として、イングランド教会の支配的な環境の中で、非国教主義がどのように食い込んでいったのかという視点から考えなくてはならない。既述のようにサセックスにおいては、東部・北東部のハイ・ウィールド地帯を中心に非国教主義が食い込んでおり、そこは同時に製鉄・ガラス・皮なめし・繊維などの農村工業が存続する地域でも

あった。

さらに宗教上の立場の違いは政治的立場にどう影響したであろうか。近年ヴィクトリア朝の選挙行動の研究が進んでおり、人びとの政治活動に大きな影響を与えた要因として、階級ではなく、むしろ宗教上の立場の相違が強調されている⁸¹⁾。教会の社会生活への影響が減退していくのは1880年頃から1930年の間であり、宗教よりも階級が政治に直接影響を及ぼすようになるのは第一次大戦以降だといわれる⁸²⁾。1936年時点で、19世紀におけるノフォークの労働者の生活を開放型村落と閉鎖型村落の対照として描いたスプリングール (L. Marion Springall) は、明らかに現在の研究動向を先取りしているが、政治と宗教との関連を村落構造と絡めて、「……しかし農村の利害は分裂していた。いくつかの例外はあるが、領主と教区牧師 (the vicar) は保守党 (Conservative) だった。……村の商店主、大工、他の職人は通常自由党だった」と書いている⁸³⁾。あるいは別の論者は「1850年頃、『ウィッグ—自由党連合』 (the Whig—Liberal coalition) への非国教主義者の忠誠 (allegiance) は非常に強力で統一的であり、多くのイングランド教会の会員は保守党を支持する際に強い圧迫を感じた。こうした圧力が増大するにつれ、政治的・宗教的生活の両面での鋭い党派的亀裂が、高度に同類的で相互に敵対的な、非国教徒・自由党グループとアングリカン・保守党のグループを生み出した」と指摘する⁸⁴⁾。1918年以前において、中産階級と労働者階級によって傾向は若干異なるが、「非国教徒は、アングリカンよりも、リベラリズムに傾く傾向がある」との研究もある⁸⁵⁾。また、教派ごとのエートスと個別の政治との間には広い親和性 (affinities) があり、非国教主義と自由主義との間には特に深い関係があったとも考えられている⁸⁶⁾。

政治はその社会の行方を決める意思決定手段であるから、政党支持の根拠をどこに求めるかは学問的に大きな意味を有する。現時点でこの点に関する十分な文献を有してないが、ヴィンセント (J. R. Vincent) の纏めたイングランドの選挙人名簿 (pollbooks) を見ると、そこに興味深い事実を垣間見ることができる。それは、特定の職業が特定の政党を支持する傾向があるようには見えないが、非国教徒の牧師 (dissenting ministers) とローマ・カトリックの司祭は明らかに自由党に票を投じる傾向のあることである⁸⁷⁾。サセックスについては、前者の非国教徒牧師の投票に関して Lewes (選挙区) でこの傾向を確認できる⁸⁸⁾。これを裏づけるようにマクレオッド (H. McLeod) は、イングランド教会の聖職者の政治行動も加味して、「1830~72年に残存する poll-books においては、アングリカンの聖職者は、他の世俗の職業の人びとと比べると、トーリーの候補者に重点的に投票している。反対に非国教徒の牧師とローマ・カトリック司祭は圧倒的にウィッグ・自由党・急進派の候補者に投票していた」と記している⁸⁹⁾。

また教派と政党支持との関連を扱うペリング (Henry Pelling) の研究においては、1910年の時点で、the Mid-Sussex, or Lewes が保守党の基盤であるが、Lewes 自体は古い市場町であり、自由党を支持する傾向にあること、Sussex South, or Eastbourne においては、明確な保守党支持であると指摘する。また、ウィールド地帯にある Hailsham の北では非国教主義の勢力が強く、自由党と結びついていることも示唆する⁹⁰⁾。

本稿は、代表的なサセックスの地方史研究者により作成された地図を利用して経済史的な背景を押さえつつ工業活動・宗教活動の分布を検討した。「閉鎖型村落」と「開放型村落」という対照的な世界の特徴⁹¹⁾を整理した本稿は、社会構造のもつ歴史的な意味を検討したものであり数的処理や時系列の分析は不十分である。それは今後の課題となる。

近年イングランドの宗教社会学研究が、本稿でも紹介したスネルとエルの研究のように、経済史や経済地理学の成果と合流させる形で展開していることは、学問の統合化・総合化という視点から高く評価されるべきであるし、方法論において、マックス・ヴェーバーの支配の社会学にも通じていることは、その手法が普遍性を有することを意味している。

【注】

¹⁾ G. C. Homans, "The Puritans and the Clothing Industry in England," *New England Quarterly*, Vol. XIII, No. 3, 1940, pp. 519-529. ホマンズは、1650年以前にニューイングランドに移住したイギリス人の出身地がイースト・アングリアを中心とする毛織物工業地帯であり、その興味深い事実として、移住者がニューイングランド（具体的には Massachusetts）において、イースト・アングリアを中心とする毛織物町（Ipswich, Sudbury, Hadleigh, Dedham, Braintree, Bridgewater, Taunton, Andover, Bradford, Malborough, Newbury, Sherborne）の地名をつけていることを指摘する。そして「ある特定の種類の社会、半農半工の小村・小都市の社会、問屋制の上に組織された家内工業の社会、織元・織布工、資本家、職人の社会——なぜそうした社会が、イングランドの多くの地域に残る、より純粋な農業社会と比べて、新しい宗教上の動きを受けやすいのか」、「……なぜ、そうした社会は古い宗教を捨てやすかったのか」と問いかけている。Ibid., p. 528. J. F. Davis, "Lollard Survival and the Textile Industry in South-east England," [in G. J. Cunning (ed.), *Studies in Church History*, Vol. III, Oxford, 1966], pp. 191-201. Michael Watts, *The Dissenters from the Reformation to the French Revolution*, Oxford, 1978, p. 354. M. W. Flinn, *Origins of the Industrial Revolution*, Longman, 1966, pp. 81-90. フリン教授の本書は40年前のものであるが、現在でも学ぶべき視角を提供している。Brian Manning, *The English People and the English Revolution*, Penguin Books, 1978, pp. 128-180. マニング教授の本書は、モリル教授らの「修正主義」陣営から批判されているけれども、現在でも市民戦争期におけるピューリタニズムの拠点が農村毛織物工業地帯にあることを示す貴重な成果である。以下の論文は、ポスト修正主義の立場から、ピューリタニズムの形成に毛織物工業地帯の自由土地保有農（freeholders）が果たした役割を解明している。Richard Cust, "Politics and the Electorate in the 1620s," [in Richard Cust and Ann Hughes (eds.), *Conflict in Early Stuart England: Studies in Religion and Politics*, Longman, 1989], pp. 134-167. また Jane Shaw and Alan Kreider (eds.), *Culture and the Nonconformist Tradition*, University of Wales Press, 1999, p. 45 も参照。1851年センサスにおけるチャペル文化の形成はある特定地域に現れている。ランカシャーの綿製造業者（cotton manufacturers）の約半数は非国教徒であった。これに関しては、半数はアングリカン（イングランド教会）の綿業企業家であり、信徒数に比べて成功した実業家の多い非国教徒はクエイカー派、ユニテリアン派、独立派であったとの山本通教授の批判的記述も記憶しておきたい。梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済』同文館、1996年、「第5章 イングランドの工業化と宗教」、167頁。今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会』みすず書房、1988年は16世紀後半から17世紀中葉にかけての宗教社会学に関する基礎文献である。「第二節 ピューリタン運動の特質——ピューリタニズム・社会構

造・識字技能・信団」は熟読されるべき理論的整理である。

- 2) 米川伸一『イギリス地域史研究序説』未来社、1972年、「第8章 地方史刊行物の紹介」で整理された各州の史料・文献紹介を実際に当たると、この辺りの事情が良く理解されるだろう。宗教社会学的観点からの名著は現在においても Alan D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England*, Longman, 1976 である。どの章も優れた視角で多面的に分析しているが、本稿との関連ではとくに第5章 The Pattern of Nonconformist Encroachment が参照されるべきだろう。ヨークシャー南部の非国教主義を地帯構造で分析したものについては以下の論文がある。D. G. Hey, "The Pattern of Nonconformity in South Yorkshire, 1660-1851," *Northern History*, Vol. VIII, 1973, pp. 86-118.
- 3) Max Weber, "Die protestantischen Ethik und der Geist des Kapitalismus," *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, 1920, S. 201 [マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989年、363頁]。本稿とは直接関係ないが、いわゆる「ヴェーバー・テーゼ」をどう扱うかという問題についても研究が進められている。近年の作品では以下の長編がある。山本通「M・ヴェーバー『倫理』テーゼを修正する(上)(中)(下)」『神奈川大学商経論叢』39巻1号、2004年3月、149-162頁、40巻1号、2004年9月、19-34頁、40巻2号、2004年12月、1-38頁。
- 4) David Underdown, *Revel, Riot, and Rebellion Popular Politics and Culture in England 1603-1660*, Oxford, 1985, pp. 276-279。わが国における近年のイングランド史の潮流とは異なり、イングランド人研究者間においては、ピューリタニズムを媒介として、毛織物工業地帯が議会派の中心勢力であることは実証レベルでかなり確定されている。近藤和彦『『イギリス革命』の変貌——修正主義の歴史学——』『思想』No. 964, 2004年、42-43頁における表現は、ジョン・モリルを意識した叙述であるが、アンダーダウンとモリル間において長期にわたる論争があることを記憶すべきであろう。Mark Stoyle, *Loyalty and Locality Popular Allegiance in Devon during the English Civil War*, University of Exeter Press, 1994, pp. 229-255 は党派構成と地域との関連を扱った最良の叙述であり、一部の矛盾を指摘しつつ、基本線でアンダーダウンを支持している。Ronald Hutton, *Debates in Stuart History*, Palgrave Macmillan, 2004, pp. 49-53。アンダーダウンとモリルについて、それぞれの功績と限界が指摘されている。John Walter, *Understanding Popular Violence in the English Revolution, the Colchester Plunders*, Cambridge, 1999 はポスト修正主義の作品として織布工(clothworkers)と議会派支持との関連が詳細に扱われている。各所で midling sort of people の位置づけについても議論されており、見事な個別研究である。飯沼次郎・富岡次郎『資本主義成立の研究』未来社、1960年は、既に45年以上前の作品であるが、開放耕地型村落と森林型村落との対比が語られており、この中で「われわれは、相対立する二つの地域の存在したことを検出した。すなわち、おなじイングランドのなかにおいて、開放耕地制度そのものが最初から存在しなかった地域と、程度の差こそあれ、開放耕地制の存在した地域とが、それである」という記述(339頁)は、現在からみても注目に値する。
- 5) Tom Williamson, *The Transformation of Rural England: Farming and the Landscape 1700-1870*, University of Exeter Press, 2002, p. 26.
- 6) これについての最良の概説は以下を参照。Barry Coward, *Social Change and Continuity in Early Modern England 1550-1750*, Longman, 1988, pp. 14-17.
- 7) 16・17世紀については以下の文献を参照。今関恒夫「ピューリタニズムの社会経済的基盤」(梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済』同文館、1996年に所収)。ジョン・サースク著、鶴川馨訳『1700年にいたるイギリス農業史：最近の研究動向について』立教大学国際学術報告書第五輯、1985年、「IV 近代初頭の英国の地主層：タイプとステレオタイプ」、57-70頁は、地主層の相違に関して、従来の西北部・東南部の区分で関連づけるのではなく、地域により地主層の厚みが違うことと、開放性教区と閉

鎖性教区の対照に注目すべきことを促した貴重な内容である。マーガレット・スパッフオド・鵜川馨編『イングランド近世における宗教と社会』立教大学国際学術報告書第十三輯、1996年は、サースクの描く農村工業地帯に非国教徒が重なり合って現れるという主題を取り上げる。「16、17世紀において農村工業が存在した地域、つまり、副業地帯、あるいは1970、80年代の専門用語でいえば、プロト工業地帯と、また強力な非国教主義の伝統が存在した地域の間想定される結合について広く考えさせられるのである」との記述(53頁)が象徴的である。じつはこの関係は、19世紀においても同様であることを本稿では示すことになる。Margaret Spufford (ed.), *The World of Rural Dissenters 1520-1725*, Cambridge, 1995, pp. 40-64. 米川伸一、前掲書、「エピローグ——『大反乱 (Great Rebellion)』——」423-445頁。米川教授は、ノフォーク、サフォークにおいて「村落構造の二類型」の重要性を指摘している。中野忠『前工業化ヨーロッパの都市と農村』成文堂、2000年、44-45頁。

- 8) 18~19世紀のイングランド史において見逃せない視点がこの「チャーチとチャペル」であることに注意。Barry Coward, *op. cit.*, p. 96. わが国のイングランド史研究でチャーチ文化とチャペル文化の差異の重要性を意識した成果は少ないが、管見のかぎりでは以下の論文がその重要性を指摘しており注目に値する。尾上正人「社会主義の世俗化と第一次世界大戦」『大原社会問題研究所雑誌』No. 526・527、2002年、とくに61-63頁。これは19世紀イングランド史を単純な階級史観で見ることの警鐘ともなっている。
- 9) 拙稿「イングランドにおける二つの農村構造—「閉鎖型村落」と「開放型村落」の社会学—」亜細亜大学『経済学紀要』第28巻2・3合併号、2004年3月、29-53頁。Barry Coward, *op. cit.*, p. 15. 斉藤修『プロト工業化の時代』日本評論社、1985年、126-127頁。酒田利夫「プロト工業化期ミッドランズの農村枠編業と社会構造」[石坂昭雄(研究代表)『原基的工業化と社会・経済的変容に関する比較的研究』平成元年度~平成2年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書、平成3年3月]、25-25頁。John Langton and R. J. Morris (ed.), *Atlas of Industrialising Britain 1780-1914*, Methuen, 1986, pp. 54-59. [J. ラングトン & R. J. モリス編、米川伸一・原剛訳『イギリス産業革命地図：近代化と工業化の変遷1780-1914』原書房、1989年、54-59頁]。原書・訳書(共に59頁)にある「開放的農村」と「閉鎖的農村」の対照が参考になる。Tom Williamson and Liz Bellamy, *Property and Landscape: A Social History of Land Ownership and the English Countryside*, George Philip, 1987, pp. 162-172.
- 10) D. R. Mills, "English Villages in the Eighteenth and Nineteenth Centuries," *Amateur Historians*, Vol. 6, No. 8, 1965, pp. 271-278. B. A. Holderness, "'Open' and 'Close' Parishes in England in the Eighteenth and Nineteenth Centuries," *Agricultural History Review*, Vol. XV, No. 2, 1972, pp. 126-139. D. R. Mills, *Lord and Peasant in Nineteenth Century Britain*, Groom Helm London, 1980. 同時代の証言を含むものでは、James Caird, *English Agriculture in 1850-51, 1852*, (reprint, Augustus M. Kelley, 1967) (本文で引用)。Alan Everitt, *The Pattern of Rural Dissent: the Nineteenth Century*, Leicester University Press, 1972は村落構造を意識した非国教主義のいまや古典的な研究。K. D. M. Snell and Paul S. Ell (eds.), *Rival Jerusalems the Geography of Victorian Religion*, Cambridge, 2000はこの問題に関する近年の集大成。閉鎖型村落と開放型村落については、11章 Conformity, Dissent and the Influence of Landownershipで十分に展開されている。これ以前において以下の成果もあり、参照されるべきだろう。K. D. Snell, *Church and Chapel in the North Midlands: Religious Observance in the Nineteenth Century*, Leicester University Press, 1991.

その他関連する基本論文は以下の通りである。閉鎖型村落について以下のものがある。

M. A. Havinden, "Agricultural Progress in Open-Field Oxfordshire," *Agricultural History Review*, Vol. I X, 1961, pp. 73-83. A. C. Chibnall, *Sherington: Fiefs and Fields of a Buckinghamshire Village*, Cambridge, 1965. Margaret Spufford, *A Cambridgeshire Community: Chippenham from Settlement to Enclosure*, Leices-

ter University Occasional Papers, No. 20, 1965.

また開放型村落については以下のものがある。A. B. Appleby, "Agrarian Capitalism or Seneurial Reaction? The Northwest of England 1600-1700," *American Historical Review*, Vol. LXXX, 1975, pp. 574-594. D. Hey, "A Dual Economy in South Yorkshire," *Agricultural History Review*, Vol. XVII, 1969, pp. 108-119. D. Hey, *An English Rural Community: Mydle under the Tudors and Stuarts*, Leicester University Press, 1974., D. Hey, "The Changing Pattern of Nonconformity, 1660-1851," [in Sidney Pollard and Collin Holmes (eds.), *Essays in the Economic and Social History of South Yorkshire*, South Yorkshire County Council, 1976], pp. 204-217. J. D. Marshall, "Agrarian Wealth and Social Structure in Pre-industrial Cumbria," *Economic History Review*, Second Series, Vol. XXXIII, No. 4, 1980, pp. 503-521. P. A. Pettit, *The Royal Forests of Northamptonshire: A Study in their Economy 1558-1714*, Northampton Record Society Vol. 23, 1968. V. Skipp, Economic and Social Change in the Forest of Arden 1530-1674, [in J. Thirsk (ed.), *Land, Church and People*, British Agricultural History Society, 1970], pp. 84-111. V. Skipp, *Crisis and Development: an Ecological Case Study of the Forest of Arden 1570-1674*, Cambridge University Press, 1974. G. H. Tupling, *The Economic History of Rossendale*, Manchester University Press, 1927.

個別研究としては、James Obelkevich, *Religion and Rural Society: South Lindsey 1825-1875*, Oxford, 1976. Albion M. Urdank, *Religion and Society in a Cotswold Vale: Nailswort, Gloucestershire 1780-1865*, University of California Press, 1990 などがあり、どれも開放型村落と閉鎖型村落を軸として展開している。時期は17世紀を扱うが、Daniel C. Beaver, *Parish Communities and Religious Conflict in the Vale of Gloucester 1590-1690*, Harvard University Press, 1998 も上記の研究書と同一角度からの分析である。

また産業革命以前のヨークシャーの状態を知る上で、以下のバランスの取れた研究書は見逃せない。筆者は地元に住む高校教員であり開放型教区の特徴がうまく整理されている。M. L. Baumber, *A Pennine Community on the Eve of the Industrial Revolution: Keighley and Haworth between 1660 and 1740*, J. L. Crabtree, 1977.

- 11) 中村勝己「17世紀ケントの社会と経済(上)——近世イギリス思想史研究序説(3)——」『三田学会雑誌』第75巻3号、1982年、33(261)-54(282)頁。同「レスターのピューリタニズム(1)」『三田学会雑誌』第81巻1号、1988年、18-55頁。
- 12) 篠塚信義「プロト工業化——イギリス：農業との関連を中心に——」[石坂昭雄(研究代表)『原基的工業化と社会・経済的変容に関する比較史的研究』平成元年度～平成2年度科学研究費補助金総合研究(A)研究成果報告書、平成3年3月、3-12頁]。ケントについては同「ウッドランド形成史覚書—ケント・ウィールドに関する研究史の批判的検討」[イギリス中世史研究会編『中世イングランドの社会と国家』山川出版社、1994年、所収]。歴史理論的な分析では、同「フォレスト、王領、そして農村工業」[世良見志郎編『ヨーロッパ身分制社会の歴史と構造』創文社、1987年、所収]。F.メンデルス/R.ブラウン他著、篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編訳『西欧近代と農村工業』北海道大学図書刊行会、1991年、「解題」(篠塚信義)、355-388頁。
- 13) 拙稿「東部サセックスにおける農村工業検出の基本的視点」亜細亜大学『経済学紀要』第17巻3号、1992年、95-124頁。
- 14) Julian Cornwall, Farming in Sussex, 1560-1640, *Sussex Archaeological Collections*, Vol. 92, 1954, p. 48.
- 15) 須永 [1992]、前掲論文、98-99頁。
- 16) C. E. Brent, "Rural Employment and Population in Sussex between 1550 and 1640, (Part One)," *Sussex Archaeological Collections*, Vol. 114, 1976, p. 31.
- 17) Howard Levi Gray, *English Field Systems*, Harvard University Press, 1959, pp. 498-499.

- 18) H. C. Darby (ed.), *An Historical Geography of England before A. D. 1800*, Cambridge, 1936, pp. 241-242. 羊毛については「羊毛は通常、(毛織物)工業が位置する地帯 (region) ではなく、近隣の農業地帯 (farming region) で入手できた」というサースクの記述が物語っている。サースクはケント・ウィールド地帯の毛織物工業との関連で書いているが、ここでの農業地帯とは平場穀作地帯を指している。Joan Thirsk, "Industries in the Countryside," [in F. J. Fisher (ed.), *Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart England*, Cambridge, 1961], p. 71.
- 19) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *An Historical Atlas of Sussex*, Phillimore, 1999, p. 38.
- 20) 須永 [1992]、前掲論文、109頁を参照。
- 21) 須永 [1992]、前掲論文、101-102頁。
- 22) 以下の関連する論文が参照可能である。D. W. Crossley, "The Management of a Sixteenth-Century Ironworks," *Economic History Review*, Second Series, Vol. XIX, 1966, pp. 273-288. D. W. Crossley, "The Performance of the Glass Industry in Sixteenth-Century England," *Economic History Review*, Second Series, Vol. XXV, 1972, pp. 421-433.
- 23) H. C. Darby (ed.) [1936], *op. cit.*, p. 415. 17世紀初頭においてこの地域はロンドンに市場を求めており cast-iron guns の製造で独占的な位置を占めていた。
- 24) Peter Brandon, *The Kent & Sussex Weald*, Phillimore, 2003, p. 131.
- 25) H. C. Darby (ed.), *A New Historical Geography of England before 1600*, Cambridge, 1973, p. 230.
- 26) Mark Antony Lower, "Sussex Iron Works and Iron Masters," *Sussex Archaeological Collections*, Vol. XVIII, 1866, p. 11に記載されたものを引用した。
- 27) Charles Dawson, "Sussex Iron Work and Pottery," *Sussex Archaeological Collections*, Vol. XLVI, 1903, p. 18.
- 28) J. J. Parsons, "The Sussex Ironworks," *Sussex Archaeological Collections*, Vol. XXXII, 1882, pp. 21-23. Anthony Fletcher, *A County Community in Peace and War: Sussex 1600-1660*, Longman, 1975, p. 17.
- 29) G. H. Kenyon, *The Glass Industry of the Weald*, Leicester University Press, 1967, p. 13, p. 115, p. 140, pp. 210-212.
- 30) C. E. Brent, "Rural Employment and Population in Sussex between 1550 and 1640, Part Two," *Sussex Archaeological Collections*, Vol. 116, 1978, p. 44, p. 47. 小土地保有農中心の世界がウィールドであったのは、サセックスばかりでなく、ケントのウィールドにおいても同様であったのは以下の文献を参照。Michael Zell, *Industry in the countryside: Wealden Society in the Sixteenth Century*, Cambridge, 1994, pp. 29-30.
- 31) Brian M. Short, "The Changing Rural Society and Economy of Sussex 1750-1945," [in The Geography Editorial Committee (ed.), *Sussex: Environment, Landscape and Society*, Alan Sutton, 1983], p. 150.
- 32) Brian M. Short [1983], *op. cit.*, p. 157. Pat Hudson (ed.), *Regions and Industries: A Perspective on the Industrial Revolution in Britain*, Cambridge, 1989, pp. 170-171. ウィールド地帯では産業上の基軸が半農半工 (dual employment) の農村工業から農業のみの特化へと移行するのである。
- 33) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *op. cit.*, p. 104. J. J. Parsons, *op. cit.*, p. 20. J. R. Armstrong, *A History of Sussex*, Phillimore, 1961, 1995 (Fourth Edition), p. 93. ただし、アームストロングの場合、最後の溶鉱炉の消滅が1809年となっている。またドーソンは Ashburnham で最後の溶鉱炉が閉じたという年を、「故 Topley 氏はその著 *Memoir of the Geology of the Weald*, p. 346 で1828年を Ashburnham で最後のウィールドの溶鉱炉が消えた年としている」と記述している。Charles Dawson, *op. cit.*, p. 26.
- 34) Howard C. Tomlinson, "Wealden Gunfounding: An Analysis of its Demise in the Eighteenth Century," *Economic History Review*, Second Series, Vol. XXIX, No. 3, 1976, pp. 388-389.

- 35) J. Chapman, "The Parliamentary Enclosures of West Sussex," *Southern History*, Vol. 2, pp. 73-91.
- 36) Brian M. Short [1983], *op. cit.*, p. 152.
- 37) この史料には出版年が記載されておらず、おそらく1870-72年に刊行されたと推定される。情報内容は1860年代のものとみてよいだろう。1875年に2巻本も刊行されているが、6巻本は division of landed property types of ecclesiastical living, value of the living, whether the living included accommodation and real property values に関する情報が含まれている。K. D. M. Snell and Paul S. Ell, *op. cit.*, p. 454 を参照。Alan Everitt, *The Pattern of Rural Dissent: the Nineteenth Century*, Leicester University Press, 1972 は本史料に触発されて書いたものであることを考えると、その重要性を十分に理解できる。
- 38) Dennis Mills, "Spatial Implications of the Settlement Laws in Rural England," [in the Open University, *Poverty and Social Policy 1750-1870*, Open University Press, 1974], p. 19.
- 39) James Caird, *op. cit.*, p. 8.
- 40) *Ibid.*, p. 75.
- 41) *Ibid.*, p. 90.
- 42) *Ibid.*, p. 197.
- 43) *Ibid.*, p. 516. 同時代の記述ではないが、イースト・アングリア (East Anglia) の対照的な村落形態については以下の文献を参照のこと。Howard Newby, *The Differential Worker: a Study of Farm Workers in East Anglia*, Allen Lane, 1977, pp. 23-91.
- 44) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *op. cit.*, p. 98.
- 45) Peter Brandon and Brian Short, *The South East from AD 1000*, Longman, 1990, p. 319.
- 46) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *op. cit.*, p. 98.
- 47) June A. Sheppard, "Small Farms in a Sussex Weald Parish 1800-1860," *Agricultural History Review*, Vol. 40, No. 2, p. 128.
- 48) *Reports to the Poor Law Board on the laws of Settlement, and Removal of the Poor*, London, 1850, p. 89. (以下、Reports と略する)
- 49) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *op. cit.*, p. 98.
- 50) *Reports*, p. 89.
- 51) Edward Boys Ellman, *Recollections of a Sussex Parson*, Combridges, 1925 (初版1912), p. 164.
- 52) この関係については、須永 [2004]、前掲論文、31頁の表を参照。
- 53) John A. Vickers, *The Religious Census of Sussex 1851*, Sussex Record Society, Vol. 75, 1989 はこの議会史料を改めて整理した史料集である。ちなみに他州については以下のような史料集が刊行されている。John A. Vickers (ed.), *The Religious Census of Hampshire 1851*, Hampshire County Council, 1993. R. W. Ambler (ed.), *Lincolnshire Returns of the Census of Religious Worship 1851*, Lincoln Record Society Vol. 72, 1979. 開放型村落と閉鎖型村落の定義については、pp. lxiii-lxxiv, Social Conditions and Religious Worship が特に有益である。Margery Tranter (ed.), *The Derbyshire Returns to the 1851 Religious Census*, Derbyshire Record Society, Vol. XXIII, 1995. 土地所有と教派との関係については、pp. xxxiii-xlvi において、アラン・エヴェリットの論稿を批判的に引用しながら説明している。Clive D. Field (ed.), *Church and Chapel in Early Victorian Shropshire: Returns from The 1851 Census of Religious Worship*, Shropshire Record Series, Vol. 8, 2004. 地帯別の説明はしていないが、詳細な introduction は有益である。その他に以下のようなものもある。D. W. Busby (ed.), *Bedfordshire Ecclesiastical Census 1851*, Bedfordshire Historical Record Society, Vol. 54, 1975. E. Legg (ed.), *Buckinghamshire Returns of the Census of Religious Worship 1851*, Buckinghamshire Record Society, Vol. 27, 1991. J. Burg (ed.), *Religion in Hertfordshire 1847 to*

- 1851, Hertfordshire Record Society, Vol. 11, 1995. J. Ede and N. Virgoe (eds.), *Religious Worship in Norfolk: The 1851 Census of Accommodation and Attendance at Worship*, Norfolk Record Society, Vol. 62, 1998. M. Watts (ed.), *Religion in Victorian Nottinghamshire The Religious Census of 1851*, (2vols), University of Nottingham Centre for Local History Record Series, No. 7, 1988. K. Tiller (ed.), *Church and Chapel in Oxfordshire 1851*, Oxfordshire Record Society, Vol. 55, 1987. D. Robinson (ed.), *The 1851 Religious Census: Surrey*, Surrey Record Society, Vol. 35, 1997.
- 54) センサスに関するパイオニア的な論文は K. S. Inglis, "Patterns of Worship in 1851," *Journal of Ecclesiastical History*, XI, 1960, pp. 74-86. イングランド南部に限定すると、B. I. Coleman, "Southern England in the Census of Religious Worship, 1851," *Southern History*, Vol. 5, 1983, pp. 154-188 がある。
- 55) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *op. cit.*, p. 76.
- 56) K. D. M. Snell and Paul S. Ell, *op. cit.*, p. 55, p. 71.
- 57) Kim Leslie and Brian Short (eds.), *op. cit.*, p. 77.
- 58) これについては、日本語論文では、川分圭子「旧非国教徒の時代—ある貿易商一族の信仰—」『京都府立大学学術報告（人文社会）』、第 52 号、2000 年、13 頁。諸教派の分類については、山本通「イングランドの工業化と宗教」[梅津順一・諸田實編著『近代西欧の宗教と経済』同文館、1996 年]、153-183 頁を参照。
- 59) David Hempton, *Religion and Political Culture in Britain and Ireland from the Glorious Revolution and the Decline of Empire*, Cambridge, 1996, p. 28.
- 60) B. I. Coleman, *The Church of England in the Mid-Nineteenth Century, a Social Geography*, the Historical Association, 1980, pp. 16-17.
- 61) *Ibid.*, p. 18.
- 62) Joan Thirsk, "English Rural Communities: Structures, Regularities, and Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries," [in Brian Short (ed.), *The English Rural Community: images and analysis*, Cambridge, 1992], p. 54.
- 63) B. I. Coleman, *op. cit.*, pp. 19-23.
- 64) Alan Everitt [1972], *op. cit.*, p. 60. エヴェリットはケントに関して述べているが、その特徴はサセックスにおいても同様と考えられる。
- 65) A. D. Gilbert, *op. cit.*, p. 105.
- 66) George Eliot, *Silas Marner*, Watermill Press, 1983, pp. 6-7 [ジョージ・エリオット作、土井治訳『サイラス・マーナー』岩波文庫、1988 年、17-18 頁]。原著は 1861 年作である。
- 67) *Ibid.*, p. 4 [同訳書、13 頁]。
- 68) *Ibid.*, p. 23 [同書、41 頁]。
- 69) *Ibid.*, p. 24 [同書、42 頁]。
- 70) *Ibid.*, p. 99 [同書、154 頁]。尾上正人、前掲論文、62-63 頁でも的確に指摘されている。Snell and Ell, *op. cit.*, p. 1.
- 71) 塚田理『イギリスの宗教』聖公会出版、1980 年、71 頁。
- 72) Max Weber, *a. a. O.*, S. 81 [マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳、前掲書、131-133 頁]。これは、経済史的には人間類型論につながる内容である。文学評論で古典的なものでは、Edward Dowden, *Puritan and Anglican: Studies in Literature*, Kegan Paul, 1910 が参照されるべきである。梅津順一「ヴェーバーとダウデン—ピューリタニズムの評価をめぐる—」『聖学院大学論叢』第 18 巻 2 号、2006 年、21-34 頁も参照。アングリカンの Richard Hooker と、ピューリタニズムの流れを受け継ぐ John Milton や John

Bunyan とのエートスの差が、象徴的な意味で「二つの型のイギリス人」の原型である。さらに付け加えれば、ドイツ人ベルンシュタインが1880年代末から90年代前半において「イギリス体験」として強烈な印象を受けた世界は、労働者の「アスケーズ」（禁欲）であり、イングランドにおける非国教主義のエートスである。亀嶋庸一『ベルンシュタイン』みすず書房、1995年、第3・4章を参照のこと。マックス・ヴェーバー、前掲書、348頁。越智武臣『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、1966年、328-329頁。これとの関連で越智氏がイギリス文化を扱うに当たって Gentlemanideal 対 Puritanism という二つの型を示したことは示唆的であった。

- 73) Alan Everitt, *op. cit.*, pp. 65-67. エヴェリットは George Eliot, Margaret Oliphant が若い時代に非国教主義の世界で過ごしたことを指摘し、それが彼らの描く小説の世界に影響していることを指摘している。近年ではこのテーマはスネルにより開拓されている。K. D. M. Snell, *The Bibliography of Regional Fiction in Britain and Ireland, 1800-2000*, Ashgate, 2002.
- 74) Robert Currie, Alan Gilbert and Lee Horsley, *Church and Churchgoers: Patterns of Church Growth in the British Isles since 1700*, Oxford, 1977, p. 102.
- 75) Hugh McLeod, *Religion and Society in England, 1850-1914*, Macmillan, 1996, p. 112.
- 76) D. M. Smith, "The British Hosiery Industry at the Middle of the Nineteenth Century: An Historical Study in Economic Geography," *Transactions and Papers of the Institute of British Geographers*, No. 32, 1963, pp. 135-136. 靴下編み工業が開放型教区 (open parish) で開花していることと、また、1844年ノティンガムの北数マイルにある Papplewick において、救貧税負担との絡みがあって、それを増やさないために、地方の地主が貧しい職人 (framework knitters や stockings) の移入を防ごうとして、すべての製造業を禁止した事例を紹介している。
- 77) Joan Thirsk, "Seventeenth-Century Agriculture and Social Change," [in Joan Thirsk (ed.), *Land, Church, and People, Essays presented to Professor H. P. R. Finberg*, Braodwater Press, 1970], p. 157.
- 78) *Ibid.*, pp. 167-168.
- 79) Jane Shaw and Alan Kreider (eds.), *op. cit.*, p. 111.
- 80) 近年における本格的な市民社会論は中村勝己『近代市民社会論』ブリコ (今日の問題社)、2005年である。個別の主題が多方面から立体的に語られるが、その中核部分に、共同体との関連で、イングランドや北アメリカの伝統である「非国教主義」のゼクテ論があることを見抜く必要がある。このテーマは、同じ筆者の『現代とはどういう時代か』江ノ電沿線新聞社、2005年においても経験的に語られている。たとえば同書、166-167頁。
- 81) 本稿の対象時期より下るけれども、イングランドの政党と宗教との関係については以下の研究が参考になる。Michael Kinnear, *The British Voter: An Atlas and Survey since 1885*, Cornell University Press, 1968. Kenneth D. Wald, *Crosses on the Ballot: Patterns of British Voter Alignment since 1885*, Princeton University Press, 1983.
- 82) Hugh McLeod, *Religion and the Working Class in Nineteenth-Century Britain*, Macmillan, 1984, p. 65.
- 83) L. Marion Springall, *Labouring Life in Norfolk Villages 1834-1914*, George Allen & Unwin, 1936, p. 109. 本書は同時代の史料を使い村落構造論を軸として議論している。現在からみて惜しいのは本文中に典拠が記載されてないことである。
- 84) Robert Currie, Alan Gilbert and Lee Horsley, *op. cit.*, p. 107.
- 85) David Butler and Donald Stokes, *Political Change in Britain: Forces Shaping Electoral Choice*, Penguin Books, 1971 (初版 1969), 6 Variations of Alighment, pp. 158-189. 引用は p. 170.
- 86) Hugh McLeod [1996], *op. cit.*, p. 94. 「大部分のカトリック教徒とユダヤ教徒が自由党と結びつくのはか

なり表面的なものであり、その時々々の利害意識に由来する」とのコメントにも注意。

⁸⁷⁾ J. R. Vincent, *Pollbooks: How Victorian Voted*, Cambridge, 1967, p. 57, pp. 67-70.

⁸⁸⁾ *Ibid.*, p. 67.

⁸⁹⁾ Hugh McLeod [1984], *op. cit.*, p. 44.

⁹⁰⁾ Henry Pelling, *Social Geography of British Elections 1885-1910*, Macmillan, 1967, p. 70.

⁹¹⁾ ブライアン・ショートは経済地理学者であるが、以下の論文で、二つの対照的な村落構造の特徴を「閉鎖型教区」と「開放型教区」として整理している。Brian Short, “The Evolution of Contrasting Communities within Rural England,” [in Brian Short (ed.), *The English Rural Community: Images and Analysis*, Cambridge, 1992], pp. 28-33. この分析視角は、総合史を目ざす場合、領主支配論・共同体論を基礎としたわが国のイングランド経済史の方法論が現在でも有効であることを示すとともに、当時において史料上の制約のために展開できなかった新しい見方を指し示している。